

気管切開術-7年間100例の経験

会場での質疑応答

Q1: 気管切開術は飼い主にとっては抵抗のある処置だと思われ、それを多数実施しているが、どのような過程で患者を受け入れているか？

A1: 気管切開術の飼い主の印象は十分な説明をすれば私は少し違うように感じています。当院では全ての飼い主様と来院前に診療の方向性を説明し、気管切開を行う可能性があればその説明を行い、実施の了解を得てから受け入れています。気管切開術を受け入れる飼い主の方々はすでにそれまでの診療過程で次第に悪化していくペットの苦しそうな呼吸を成す術なく見て過ごされておりペットの死への恐怖感も抱いており、どのような方法でも少しでも早く呼吸症状を緩和させたいという強いお気持ちがあるようです。気管切開という処置の説明をすると、むしろ救われたようにご了解されます。気管切開直後、これまでの息苦しきからただちに解放され、安らかにペットが寝ている姿を飼い主様はご覧になり、たまたまよいペットの死への恐怖感から一瞬で解放されます。

A2: 猫の永久気管切開実施数が犬に比べて圧倒的に少なく、また転帰もよくないとのことだが、これは適用疾患が少ないという事なのか？ また、転帰不良の理由はどのようなことが考えられているのか？

Q2: 猫の永久気管切開術は今回の症例収集時期以前より予後不良との報告がいくつかありました。猫は喉頭腫瘍や炎症性喉頭疾患などはむしろ犬より発症頻度が多く、適用の機会になることは多いのですが、そのような過去報告に従い、できるだけ適用を避けてきました。経験として一時的気管切開に関しては入院下でとても状態よく管理できるという印象がありました。さらにその中で、永久気管切開術適用を避けられない状況にも遭遇し適用してきました。その印象でも、入院期間中はとてもよい状態を維持できました。しかし、退院後室内気管理に移行すると、完全室内気管理にされると早いもので2週間後に呼吸不全で亡くなるケースがありました。これまでの過去の海外報告でも同様の所見であり、その理由として猫は喉頭疾患が多く喉頭由来の分泌物増加が気管ろう孔に降下しろう孔を閉塞してしまうと考察されていました。しかし、私の経験では必ずしもろう孔が分泌物で満たされていなくても、呼吸困難にいたったケースを数例

みえています。日頃、気管支鏡検査にて猫は犬に比べ、相対的に気管支径が小さく、また粘液も多いことを確認しております。また、少しの気道刺激で気管支収縮することもあります。したがって、猫は永久気管切開術にて乾燥室内気に気管気管支樹が暴露した場合、末梢気道域の気管支の収縮と粘液の粘稠化が同時に生じ、これが潜在性に進行し、ある一定数の気道が閉塞すると代償できず呼吸困難を生じ、さらに呼吸促迫に至ると仮説しています。これは、一時的気管切開や永久気管切開術の入院下での、加温/加湿管理を徹底し、ネブライザー療法も1日2回欠かさず行った場合では、よい呼吸状態が維持できることで説明できるように思われます。その仮説のもとで、報告には含まれていませんが、悪性喉頭腫瘍と悪性鼻腔内腫瘍の2例の猫症例に、術前に帰宅後の終日加温・加湿環境維持を約束いただいた上で、永久気管切開術を行った経験があります。両例は腫瘍を残し気道確保のみ行いましたが、その結果、それぞれ208日間、151日間自宅で過ごすことができました。これは本報告の悪性腫瘍の生存期間中央値より長く、猫の永久気管切開術の術後管理には終日加温・加湿管理が必要であることを示し、上記仮説を部分的に証明していると考えております。